ほうさ 第3号

1980年8月

名古屋市蓬左文庫

Nagoyashi Hôsabunko

# 名古屋叢書の続刊

「名古屋叢書」の編纂事業が始まったのは、戦局も切迫しつつあった昭和16年のことである。市制50周年記念事業として、当初は全12編50巻の刊行を予定したのであるが、同19年、「決戦非常措置要綱」が発布されるに及び、〝時局に協力せざる文化事業〟として規模が大幅に縮少され、それに追い討ちをかけるように、印刷所や刊行直前の校正刷が空襲を受けて焼失した。このような悪条件の下で、ついに刊行は見送りとなったまま昭和24年、市立名古屋図書館（現鶴舞中央図書館）内の編纂室は閉室された。関係者の熱意のこもった、5万枚にも及ぶ原稿を残して。（「郷土志料名古屋叢書総目録附編修略記」による）

それから10年後の昭和34年、名古屋開府350周年・市制70周年記念事業として名古屋叢書刊行事業が復活した。編纂室を蓬左文庫に移し、当初から尽力してこられた市橋鐸氏らを編集委員にむかえ、先の原稿をもとに編集を進め、5か年の間に10編25巻を、続く5か年で「続編」20巻を刊行し、索引・総目録3巻とあわせて計48巻を世に送り、好評を得た。これによって、眠っていた原稿の約$\frac{2}{3}$が〝日の目を見た〟わけである。

今回、蓬左文庫移管30周年記念事業として実施する名古屋叢書の続刊は、刊行が待望されながら、未刊のまま保留されていた「士林泝回続編」や「天保会記」等の原稿を基本に、新たに、史料価値の高いものもとり入れて、地方史研究に寄与することを目ざして行なうものである。現在までに、下記のように監修者3名と編集者5名が決定し、本事業の総合的構想・収録書目等を検討中であって、それらについては、次号でお知らせするつもりである。なお、第1回配本（「諸家雑談他一編」（細野要斎著）ができあがるのは来年3月頃の見込である。——当初から起算すると、この名古屋叢書刊行はやがて半世紀にも及ぼうとする事業である。その間、中断や編集方針の変更があり、今回は編集者の顔ぶれも一新したが、資料集としての息の長さと利用価値を思うと、事業継続への意欲と責任とを感ぜずにはいられない。各位のご理解とご支援をお願いする次第である。

監修（前編集委員）

| | |
|---|---|
| 市橋　鐸 | 名古屋市文化財調査委員 |
| 佐々木隆美 | 椙山女学園大学教授 |
| 所　三男 | 徳川林政史研究所所長 |

編集委員

| | |
|---|---|
| 芥子川律治 | 名古屋市文化財調査委員 |
| 小島広次 | 市立女子短期大学教授 |
| 杉浦豊治 | 金城学院大学教授 |
| 野田千平 | 同 |
| 林　薫一 | 愛知学院大学教授 |

（以上 50音順、敬称略）

8.3(日)～9.28(日)

# 浮世絵・江戸の四季 第二部

四季の変化の明確なわが国においては、その時々の景趣の表現が絵画の重要な部分を占めてきた。周期的にくり返す季節を表現することよりも、めまぐるしく変化する一過性の時代風俗を描くことを主眼とした浮世絵にあっても、決して季節表現がなおざりにされていたわけではない。大和絵や山水画とは趣を異にし、日常生活－それも庶民の－により密着した部分で、不断に取扱われてきたことは、改めて述べるまでもない。――今回も、第一部に引き続き、浮世絵に描かれた四季の風物や年中行事等に焦点をあてて、江戸の季節感をしのんでみようと思う。とりあげた作品は、江戸後期の浮世絵界を風靡した歌川派から国貞・国芳等と、これに対抗し、孤高を誇った菊川派の英泉とである。尾崎久弥コレクション中から42種60枚を、季節別に展示した。以下、各季節毎に、代表的な作品についてみてみよう。

春の部から　**見立名所桜尽　御殿山ノ花**

春といえば、まず〝桜〟あるいは〝花見〟というのが今も昔も変わらない日本人の季節感であるが、同じ花見でも時代によって趣が異なる。現代のように花の観賞そのものよりも、満開の桜の下での遊興が優先しだしたのは江戸時代で、それも後期には一般庶民も花見にくり出すようになった。御殿山は、隅田川堤・飛鳥山等と並ぶ桜の名所で、本図は桜の名所を背景としたシリーズものの内の一枚である。

夏の部から　**東都両国納涼花火之図**

江戸の夏をもっとも印象的に演出したのは、隅田川は両国橋附近で催される納涼花火大会であろう。この界隈は、ふだんでも茶店や食物屋・見せ物小屋が日暮まで営業してにぎわったが、特に5月28日～8月28日（陰暦）の期間は、〝納涼〟といって、夜半までの営業が許可され、初日の川開き花火大会をはじめとして、何度も花火大会が催され、江戸の市民を湧きたたせたようである。しばしば浮世絵にとりあげられた題材であるが、広重の本図は、前景を思いきり強調して散漫になりがちな群衆図の構図をひきしめている。

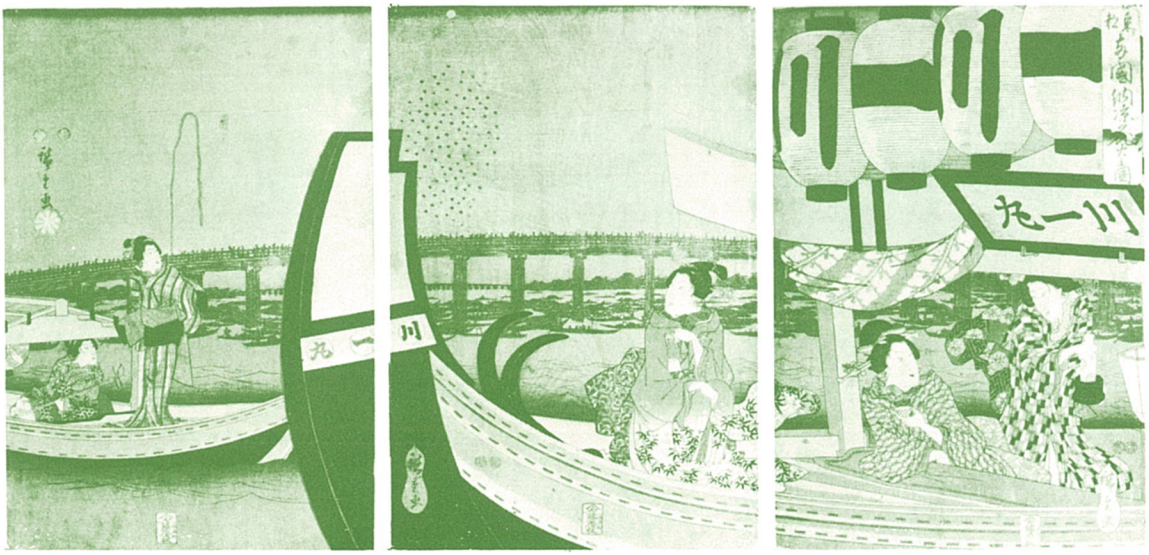
秋の部から　**風流名頭字尽　琴**

雁が列をなして飛んでゆくすがたと、琴柱が並んでいるさまが似ているというので、〝雁の琴柱〟という表現があるほどだが、本図はこの意味を含めて描かれたらしく、十三弦の琴を支えた立姿の美人の背景には、日本の秋を最も象徴的に示す満月と、それをかすめて飛ぶ雁が浮んでいる。着物の柄に選ばれたのは、これまた秋の象徴、菊の花である。

冬の部から　**〔節季候の暮雪〕**

節季候とは、江戸時代の歳末の門付けの一種で、割り竹をたたきながら町内を囃して歩き米銭をあつめた。本図は役者似顔絵もかねた滑稽な風俗図である。

## 東都両国納涼花火之図　　広重　（3枚続き）



# 出　品　目　録

## 〈春の部〉

1　春交加　太かぐら
　　五渡亭国貞　1枚
2　美艶花合
　　溪斎英泉　1枚
3　よしはらやうじ廓の四季志（三月中の町様）
　　溪斎英泉　1枚
4　花
　　一勇斎国芳　1枚
5　春夏秋冬　春（尾張屋内長人）
　　溪斎英泉　1枚
6　美人春の風
　　溪斎英泉　1枚
7　見立名所桜尽　御殿山ノ花
　　英泉　1枚
8　〔八百屋お七〕
　　五渡亭国貞　3枚続き
9　江戸名所仇競　高名輪の春の海
　　溪斎英泉　1枚
10　役者見立渡船之図
　　豊国　5枚続き

## 〈夏の部〉

11　春夏秋冬　夏（尾張屋内長登）
　　溪斎英泉　1枚
12　〔かきつばた・賀朝〕
　　豊国(二代目)　1枚
13　風流姿の花　根津のかきつばた
　　英山　1枚
14　初時鳥の図
　　豊国　1枚
15　〔ボタンと蝶〕
　　一筆斎英泉　1枚
16　光氏磯辺遊の図
　　豊国(三代目)　3枚続き
17　物日のあそび
　　（東連・木場成田屋・成駒屋）
　　(一筆庵)英泉　3枚
18　絵兄弟道引廿四孝　王裒
　　一勇斎国芳　1枚
19　縞揃女弁慶（桶屋）
　　一勇斎国芳　1枚
20　古今集和歌つくし（みつね）
　　溪斎英泉　1枚
21　虫撰　あり
　　一勇斎国芳　1枚
22　新板浮絵江戸両国橋納涼之図
　　歌川国丸　1枚
23　東都両国納涼花火之図
　　広重　3枚続き
24　〔ホタル狩り〕
　　芳虎　1枚

## 〈秋の部〉

25　風流十二月ノ内　文月
　　香蝶楼国貞　1枚
26　よしはらやうじ廓の四季誌（星祭）
　　溪斎英泉　1枚
27　春夏秋冬　秋（尾張屋内喜長）
　　溪斎英泉　1枚
28　当盛六花選　芙蓉
　　広重・豊国　1枚
29　美人合
　　国貞　1枚
30　〔ききょう〕
　　英泉　1枚
31　当世四季ノ詠
　　五風亭貞景　1枚
32　〔八代目市川団十郎死絵〕
　　一勇斎国芳　3枚続き
33　流行菊花揃
　　一猛斎芳虎　1枚
34　近江八景　石山秋月
　　二世広重　1枚
35　風流名頭字尽　琴
　　朝桜楼国芳　1枚
36　清月の月
　　朝桜楼国芳　1枚

## 〈冬の部〉

37　風雅人雪のむし路
　　一勇斎国芳　3枚続き
38　比良暮雪
　　房種　1枚
39　篠塚伊賀守妻
　　一勇斎国芳　1枚
40　縞揃女弁慶（竹屋直成）
　　一勇斎国芳　1枚
41　〔節季候の暮雪〕
　　豊国　1枚
42　うゑのの暮雪
　　一陽斎(香蝶楼)豊国　3枚続き

〔　〕は仮題

# 閲覧室より

## 資料紹介 ③

左之通、明倫堂主事より申越候。

旧臘（注・陰暦12月）御懸合申上置候活字板にて摺立申候左伝五十部、臣軌弐百部、相廻し申候。為御受取可被下候。右臣軌校合方之儀、吟味仕、申達候様御差図に付、承合候処、先達而、関進次・小河善太夫・南宮大助読合申候処、只今御座候和本、全体誤字多、宜元本無御座候付、先和本を体にいたし、本文・注共、引書被引付、誤字等相訂申候。右本を体にいたし話込為摺立申候由に御座候。左様御承知可被下候。以上。（注・文中の３名は明倫堂教授）

これは、「尾州御留守日記」（徳川林政史研究所蔵）の内の寛政７（1795）年２月27日の記事で、尾張藩校明倫堂（天明３〈1783〉年開校）から木活字版で刊行された**「春秋左伝集解」**と**「臣軌」**に関するものである。一般に、地方の藩侯ならびに藩学の出版物を藩版といい、江戸後期に例が多いが、尾張藩の場合は**明倫堂版**がこれにあたる。明倫堂版の第一号は**「群書治要」**で、整版であったが、以後は上記の如く木活字版が多い。印刷部数がせいぜい200部程度であったため、活字版の方が適していたと思われる。

従って、現在の伝本は極めて少ない。本文庫所蔵の明倫堂版は次の通りである。

| | | |
|---|---|---|
| ○群書治要 | 47冊 | 天明７（1787）年〈60－６〉 |
| ○春秋左伝集解 | 30巻15冊 | 寛政７（1795）年〈54－13〉 |
| ○帝範 | ４巻１冊 | 〈54－6,54－７〉 |
| ○臣軌 | １冊 | 〈54－8,154－14〉 |
| ○宋李忠定公奏議選（李忠定公全集） | 25冊 | 享和元（1801）年〈5ㄑ－1,54－2,154－13〉 |
| ○魏鄭公諫録 | ５巻１冊 | 享和２（1802）年〈54－４〉 |
| ○曲江張先生文集 | ４冊 | 文化２（1805）年〈54－５〉 |
| ○〔陸宣公全集 | 24巻10冊 | 明治19年 〈54－３〉〕 |

〈 〉は請求番号

## ▷▷▷ 利用ご案内 ◁◁◁

**▷開館時間**　午前9時30分～午後5時

**▷休館日**　毎月曜日・第3金曜日（館内整理日）

祝日（日曜に重なる場合は日曜開館、月・火休館）
月曜　〃　月・火休館

年末年始（12月28日～1月4日）

**▷閲覧料**　普通図書　無料

重要図書　有料（1部 100円）

**▷展示会**　特別展を除き入場無料

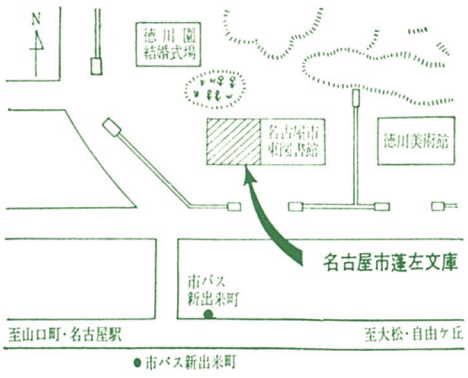
**▷複写サービス**　普通図書のうち保存上影響のないものについて複写サービスを行ないます。その他、マイクロフィルムの利用、写真撮影等の申請を受付けますので、ご来庫の上、ご相談下さい。


**名古屋市蓬左文庫**

〒461 名古屋市東区徳川町2-27

☎（052）935－2173

（市バス 新出来町 北 100m
山口町 東 500m）



**「蓬左」第３号**　☆昭和55年８月３日発行　☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫（東区徳川町２－27）
☆無料　☆不定期刊行　☆印刷：大同印刷（東区泉２－３－18）